移動する人の現状と研究視点
―東南アジアのタンザニア人交易人に注目して―

栗田和明（立教大学大学院文学研究科・教授）

Ⅰ 訪問者に注目した移民社会

１．本論の目的と対象

本報告では、インフォーマルセクターに属する交易人たちに注目する。インフォーマルセクターの定義は種々あるが、ここでは「少人数の縁者によって運営され、自らの判断と資金、労力で活動にたずさわり、利益・損失は彼ら自身に帰す諸活動分野」を指している。フォーマルな商活動として典型的なものとしては、巨大商社が社員を他国に派遣して貿易業務に当たらせる場合があろう。商社の勤務員は多数で、お互いの血縁はなく、勤務員は会社の資金を利用して活動し、その利益と損失は商社に帰す。

インフォーマルな活動であっても、それにたずさわる人びとは国際的な移動をおこなっている。「インフォーマルな商活動は国内でおこなわれ、フォーマルな活動のみが国際的に実施されている」という理解は実態に即しておらず、筆者は「国際的な商売」という言葉でインフォーマルな商活動と国際的な移動の組み合わせがありうることを報告している（栗田 2015:290）。

アフリカ人交易人のインフォーマルな活動と言ってもその内容は多岐にわたる。複数の例を示し、これらからインフォーマルセクターの交易人の活動全体を鳥瞰したい。

従来の移民社会研究では、現在移動している者ではなく、過去に移動して現在は住みついている居住者（resident）がより注目された。居住者たちがどのようなコミュニティを形成し、ホスト社会とどんな関係を築いているかが、従来の移民社会研究では焦点になっていた。移動に注目した場合でも、たとえば、複数回にわたって華人が移住を繰り返した事実を記載しても、その一次移住先と二次移住先との関連、移住の経緯が過去形で記述されている。本報告では現在移動している者を移民研究のなかで記述する視点を探る。

２．移住者と訪問者の数

移民コミュニティをとりあげる場合、一定期間該当地に居住している居住者に注目した研究が一般である。一定期間とは1年であったり（たとえばCohen & Sirkeci 2011:7）、2年であったりする。住み続ける居住者に対して、移民コミュニティを訪問して通過する、あるいは短期間だけ滞在するような者もいる。たとえば、広州のタンザニア人コミュニティを訪問するタンザニア交易人である。

居住者や訪問者の人数の計上方法としては、まず、１）通常居住している場所、あるいは、居住すべき場所での人数に計上する、いわば住民票的な人数の計上方法がある。つぎに、２）ある瞬間にいた場所で計上する国勢調査的な計上方法もある。ある一時点での存在場所を特定した交易人を、本報告では「一時（いちじ）の交易人」と表現している。３）また、観光客などに一般的であるが、１年間などの一定期間内に登場するのべ数を計上する場合もある。

移民コミュニティの居住者の場合は年間を通じて当該地に住み続けており、１）と２）で原則的に同じ数が示される。居住者について、３）の方法での人数への言及はおこなわれない。

一方、移動する者の場合には１）をとれば、その人数は移動元のコミュニティ（たとえばタンザニアのダルエスサラームの一区画）で計上され、訪問先の移民コミュニティでは計上されない。２）の方法では移動者も移動先で計上され、どの瞬間をとるかで変動も予

想される。移動者の数については、３）のようなのべ人数での計上が一般的であろう。２）の数と３）の数との関係は、どの程度の滞在期間であるかに左右されるが、これは本報告のＶ章１節で検討する。

Ⅱ 近年の人の移動の特徴

世界の各地で見られる人の移動は、具体的な年に小異はあってもいくつかの画期をへて様相を大きく変化させている。21世紀に入って十数年で、いくつかの特徴は際立ってきている。以下の数節で最近の変化について簡潔に記したい。

１．大規模化

推計する機関によって移動する人の定義も、人数も異なっているが、世界全体で移民、難民として取り扱われている人はおよそ年間２億人程度である（IOM 2013）。国外に出かけた者から故郷への仕送りは世界全体で年間1490億ドルにのぼると推計されている（2002年現在、OECD 2005: 13）。海外への送金はインフォーマルな回路を通じても多額に動いており、その実態は不詳な部分も大きい（Kivisto 2010: 152）。

２．技術的進歩

人の移動を支える技術的な要件も急速に変化しつつある。交易人は、インターネットを利用して品物の受注、発注、その他の打ち合わせが簡単にできるようになっている。さらにインターネットを通じてオークションへの参加も可能である。通信手段の発達によって、交易人がみずから移動して交易活動することの意味が変容している。

航空運賃は安くなっている。さらにエコノミークラスの客が無料で飛行機に持ち込める荷物も20キログラムではなく、一定条件下では最大70キログラムまで許容している航空会社もある。

送金の技術もイスラム圏の伝統的なハワラなどだけでなく順法、顕在化しており、迅速・安価な方法が確立しつつある。

３．日常化、一般化

移動が長距離におよび国境線を越える場合もある。国内での移動から国際的移動へ移行する際の障壁は高くない。また、国際的な移動を実施する者は例外的な存在ではなく、より一般的な行動になりつつある。

国際的な人の移動は、多数が関係するので注目される移民（華僑、印僑、ドイツへのトルコ移民、南米への日系移民など）や国際難民（現今のシリア難民など）のように思い切った決断や、大きな強制力をともなった国際的な移動だけではない。国内の移動の延長として国外にも出かける、あるいは他国に知己がいてそこまで遠距離を移動することが当然の判断である、といった移動も多くなっている。これらの移動では、国境の存在も、長距離移動も、相対的な障害でしかない。

長距離を航空機で移動するのではなく、国境付近では人びとは近距離の移動で、陸路や渡河で気軽に国境を越えている。

長距離・近距離にいずれについても、前節のような技術的進歩ともあいまって、国際的に人が動くことは日常的になり、特別に交易人として知見と意志を蓄えた人ではなく、一般の人が実施できる活動になっている。

４．全方向化

移民はかならずしも低・中所得の国から高所得の国へ、いいかえれば南の諸国から北の諸国に向かって就業の機会や経済的な充足を求めて移動しているだけではない。大まかには、南→北は全体の40パーセント、北→北は22パーセント、南→南が33パーセント、北→南が5パーセントといわれている（IOM 2013:177）。たとえば東南アジア各地に数万人レベルの日本人が住み、和僑と称されるような事例からも、北→南の移動は確実に存在することが分かる。

Ⅲ 広州でのタンザニア人

１．広州のタンザニア人居住者と交易人

本報告の主要な舞台は中国の広州であり、インフォーマルセクターに属する交易人としてはタンザニア人交易人を取り上げる。中国はアフリカ大陸から多くの交易人を惹きつけている。とくに2000年～2015年ころまでは中国は日用品、建築資材、その他の製造品を安価・大量に生み出し、これを求めるアフリカからの交易人が中国を訪問した。なかでも中国南部の広東省とその州都の広州はアフリカ人交易人の買い付け先の中心地になっている。

広州を訪問するタンザニア人交易人は、広州とその周辺で買い付けをして、タンザニアやその他のアフリカの国々に輸送する。彼らの広州での滞在期間は数日から数週間と短い。その一方で一年に複数回の訪問をすることもある。

これに対して広州に長期間滞在している居住者としてのタンザニア人もいる。彼らは留学生、タンザニア人相手のレストランや美容室の経営者、交易人相手のエージェントなどである。移民社会の研究では、他地から移動して、たとえば1年など一定期間の定住を経た居住者が形成する社会を研究対象として想定しやすい。広州でもタンザニア人居住者が暮らしており、彼らに注目した移民社会研究も可能である。

交易人は頻繁に移動し、広州を訪問すれば居住者と接触し、交易活動の中で交易人と居住者は密接に関係する。比較的短期間しか広州に滞在しない交易人と、長期滞在している居住者との両方を視野に納め、広州のタンザニア人移民社会をより包括的に記述をすすめたい。

２．居住者・訪問者の数

筆者は広州に居住しているタンザニア人について人脈をたどって調査をすすめた。彼らはレストランや床屋・美容室の経営者、交易関係の運送や書類作成のエージェント、交易人に同道して購入を助けるエージェント、留学生、卸・小売り店舗の経営者であり、総数は100名程度と推測した（栗田 2011：118）。

具体的には、広州定住のタンザニア人が関わっている店舗は、2007年時点でレストラン2店、美容院2店、オフィスがあるエージェント2店である（栗田 2011：118）。2008年の北京オリンピック時の移民締め付けを経て、2014年のレストラン等の数は、レストラン3、美容院・床屋4、オフィスをもつエージェント2となっている。レストランの数は2008年の減少のあと2014年には以前より増えている。これは2007年までの経営者の復帰ではなく、あらたなタンザニア人が参入している。美容院についても2014年にはあらたなタンザニア人がやってきている。

一方、広州にやってくるタンザニア人は年間、のべ1万人のレベルであり（栗田 2011：118）、居住者の数より2桁多い。

アフリカ人全体についてBodomo（2011）が記述している「広州で数十万人」、『新報』が報じている「広州で20万人」という人数は通過者を含んだ年間の延べ人数だとすれば、

居住者は短期滞在者ののべ数より２桁少ないというタンザニア人の割合をあてはめて、広州に居住するアフリカ人は数千人となろう。また、数千人のアフリカ人短期滞在者に対するタンザニア人居住者100人の割合は5パーセント前後となり、香港やバンコクの例（栗田 2011）と比較しても不自然な数字ではない。

Ⅳ 交易人の移動の仕方

１．タンザニアからの出国者数

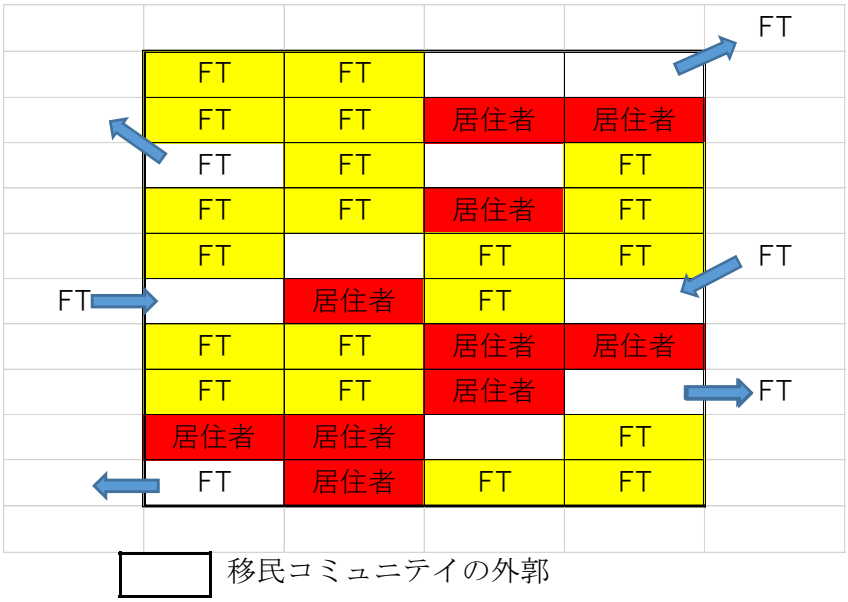
タンザニアに入国する観光客108万7千人の80.4パーセントが空港利用（The Tanzania tourism sector survey 2015のサンプル調査から推定）であり、空港利用の観光客は87万4千人である。93万人の国際便利用者（EAC Secretariat 2014:56）から87万4千人を除いた5万6千人をタンザニア人で交易、出稼ぎ、移住のために空路で国外に出て行く人数として想定することができる。広州を訪問するタンザニア人１万人、香港を訪問する１万人、バンコクを訪問する3千人、という人数はすでに筆者は報告している（栗田 2011）。これらに湾岸諸国やイギリスなどに出かける者が加わった数として5万6千人が毎年飛行機で出国すると考えて従来の報告と整合している。

２．卸売り商人の頻繁な移動

ムジクはジーンズの卸売り商人である。彼の店舗はタンザニアの中心的な都市のダルエスサラームの最大のマーケットであるカリヤコーにある。ムジクの店舗に来る客は、ダルエスサラーム内の他マーケットの小売り商人やタンザニアの他都市からの小売り商人だけでなく、マラウィ、ザンビア、モザンビークなどからの商人もいる。国外からの買い出し客は、それぞれの国で店舗を持っているか、あるいは店主から依頼されて購入に来ている者（ベンダーと呼んでいる）たちである。買い出し客は一回、1～2日の買い出しで数十万円を支出する。

ムジクは頻繁にダルエスサラームと広州を行き来している。機中泊を含んで2日かけて広州に行き、広州で５日間は買い出しをして、2日かけてダルエスサラームに戻ってくる。ムジクの広州行の期間中もカリアコーの店は親族が営業を続けている。ムジク自身は、販売が順調な時は、5日間程度しかダルエスサラームに滞在せず、次の広州行にかか

図１ 移民コミュニティの動的平衡



り、年間に20回以上も往復する。ムジクの携帯電話にはSIMカードを2枚挿入可能で、中国とタンザニアの通信会社を切り替えて使用している。ムジクは基本的にはダルエスサラーム＝広州の往復を繰り返すが、品物に応じてタイのバンコクにも買い出しに出かけることもある。事実、筆者がはじめてムジクに声をかけたのは、バンコクであった。

年間に20回以上のアフリカ＝アジア往復は忙しく、広州行の間にダルエスサラームに滞在している期間は、１週間程度である。これ以上頻繁に移動する交易人には筆者は出会っていない。一般に卸売りの店舗を持つ交易人は商品の販売が早く、頻繁な移動を繰り返している。これに対して小売り店主は、ダルエスサラーム＝広州の往復は年間に1～4回程度の者が多い。

Ⅴ FT（Frequent Traveler）への注目

１．FTの数

Ⅲ章2節で広州のタンザニア人居住者より交易人のような移動者のほうが、２桁も多いことを示した。移動者の典型は年間に20回～１回の買い付け行をしている交易人である。移動者の頻繁な移動に注目して頻繁な移動者（Frequent Traveler）、略してFTとして記述をすすめる。FTの典型は交易人であるが、観光客、巡礼者、単身赴任者、帰省者などもFTとしてとらえることができる。

前節で示した広州のタンザニア人居住者は100名程度、タンザニア人FTは1万名／年である。居住者の100名は、年間のどの時期を切り取っても原理的には不変の数である。一方、FTの1万人は1年間ののべ数である。ムジクのように年間20回も広州を訪問すれば、彼は20名と計上される。

移動しているFTは年間ののべ数を示すのが一般であろうが、ある時点で広州にとどまっているFTの数を示すこともできる。FTの広州滞在期間が１日であれば、ある一日に広州にいるFTは10,000（人）／365（日）＝約30人と考えることが出来る。ここでは平均10日の滞在で、ある一時には10,000／36.5＝約300人の滞在が一時にあるとして記述を進める。つまり居住者100人の約3倍のFTが居ることになる。Ⅱ節で示した居住者とFTの人数の２桁の差は年間の集積をみた数であり、3倍はある一時での居住者とFTの比である。

2．移民コミュニティの動的平衡

移民コミュニティの記述において、定住している居住者を記述し居住者に接触するFTは必要な場合のみ適宜記述する、という居住者中心の研究視点は十分だったのだろうか。居住者とFTを同時にとらえてコミュニティを記述しようとすると、１）ある一時の居住者とFTを示す方法も、２）1年間、あるいはさらに長い期間を集積して居住者とFTを示す方法もありえる。広州のタンザニア人コミュニティでは、１）の方法で示す場合は、FTは居住者の3倍であり、２）を使用した場合は、FTは居住者より2桁も多い。いずれの場合も居住者よりFTの数は圧倒的に多く、従来の研究よりもFTにさらに注目すべきであることを示唆している。

図２　東南アジアのタンザニア人コミュニティ　一時のFTも示す

一マスは100名前後

■：居住者　　■：一時のFT

図では100名単位の表示になっている。

１）のようにある一時をきりとった場合、個々のFTは切り取った時点ではたしかにコミュニティに存在しているが、次々に他のFTと入れ替わる。FTの個体自体は入れ替わっても、少数の固定的な居住者+多数のFTという構造自体は変わらずに継続し、コミュニテイの外郭も描くことができる（**図1**）。これは、ある場（器官、組織）を次々と各種の要素（物質）が通過していくが、全体としては一定の恒常性を保っている、生物学などで語られる動的平衡を想起させる。移民コミュニティの中の居住者としてはエージェントやレストラン経営者がいるが、これだけでは移民コミュニティの全体ではない。次々と通過していくFTまで含めて移民コミュニティの外郭を描くことが必要であろう。

３．FTが結ぶ都市

FTの移動頻度を定量的に示すことは困難であるが、FTが結ぶ地点は具体的に示すことができる（栗田　印刷中a）。FTとして代表的なものは交易人であるが、タンザニア人交易人37名について調べた結果、平均して3.3ヵ所を結んでいることが分かった。FTとしてもっとも単純な交易人を想定すると、この交易人の訪問先は買い付け地と販売先の2ヵ所になる。しかし調査結果によれば、この2ヵ所だけでなく、もう一ヵ所に立ち寄っていることが分かる。広州を去ったFTは広州以外の場所でお互いに接触をもつ機会もある。FTはお互いに孤立した存在ではなく、買い付け地、販売先以外でもお互いが接触する機会をもちながら移動している。

複数の買い出し地をもつショマリの例を紹介しよう。ショマリの活動についてはライフヒストリーとともにすでに示した（栗田 2011：35）。彼の活動は経済的な利益を求めてのものであるが、一方では楽しみとしての商活動の側面もある。ショマリは妻・子どもたちを中心にして家族で複数の店舗をカリヤコーおよび隣接のマーケットに構え、女性用の高級衣料品を中心に扱っている。広州には息子が留学し卒業後も居住しているので、妻や娘が頻繁に買い出しに出かけている。広州だけでなく、ドバイ、香港、ヨハネスブルグ、イスタンブールにも妻や娘が必要に応じて買い出しに出かけ、航空便で衣料品を運搬している。

東南アジアや湾岸諸国の複数の地域をめぐって買い出しをする交易活動は、ショマリ家以外でも普通に見られる。東南アジア内の買い付け先が複数になる例を10例認めた。アジアに出かける交易人の16例中15例とほとんどすべての交易人が広州に立ち寄る。広州に加えて買い回るとしたら、香港、さらに他の東南アジアの都市（バンコク、クアラルンプールなど）に出かけている。広州、香港、バンコク、ジャカルタにはそれぞれ購入品を送り出すタンザニア人エージェントがいて円滑に輸出できる。クアラルンプールでは、タンザニア人エージェントの存在は確認していないが、一定人数のアフリカ人居住者はいるのでタンザニア人相手にエージェントをやっている者もいるであろう。

現時点では、買い付け地としては広州を中心にした東南アジアが卓越しており、さらに買い回る先を増加させた場合に、湾岸諸国や南アフリカが目的地になる。湾岸諸国も南アフリカも21世紀になる前は交易人がまず訪れる場所であったが、広州が近年急速に求心力を増した。現時点では国際的交易人の第一の訪問場所は広州であり、湾岸諸国や南アフリカはその次の選択肢として残っている。

４．FTから見た移民コミュニティ

図２は一時の人数に注目して移民コミュニティを模式的に示したものである。定住者に対して数倍の数のFTが、一時に広州にいることが示されている。実際に広州のタンザニア人集住地を歩くと、少数の居住者と多数のFTに出会い、居住者とFTが同時に活動している様子は図2に近い。タンザニア人レストランに行けば、少数の経営者やコックに数倍する客が出入りしている。タンザニア人の床屋、輸出のエージェントのオフィスに行っても同

様である。

居住者はつねに同じ個人が居住し続ける。これに対してFTは一時の人数はいつも同一であっても、個人としては入れ替わっていることに注意したい。さらに、ある一時には広州にいたFTが別の一時には香港やバンコクにいることもある。

図２のような少数の居住者とその数倍のFTの固まりは、広州、香港、バンコク以外の地でも描くことができる。

本報告ではFTとしては交易人のみを取り上げた。交易人がFTとして典型的な存在であろう。しかし、頻繁に移動することを特徴にする者は、旅行者、巡礼者、出稼ぎの労働者、観光客、避暑・避寒客、などにも見ることができる。1年以内の滞在しかしない者は、コミュニティの成員として十全に記述されることも少ないが、その数の多さからも看過することはできない。本報告で試みたようなFTは一時で固定し、あるいは年間の集積で記載することができる。居住者の様態だけではなく、FTと居住者をともに、あるいはFTが移動する様態の方に注視することが必要であろう。

注記1　本報告は栗田編『流動する移民社会』（2016）に所収の「移動する者から見た移民コミュニティ――広州へのタンザニア人交易人に注目して――」および「移動する人の現状と研究視点」から大幅に短縮、改稿したものである。

注記2 文中の人名は仮名、地名は実名で示した。

――文献――

Bodomo, A. 2012 *African in China: A Sociocultural study and its implications for Africa-China relations.* N.Y.: Cambria Press.

Cohen, H. J. & I. Sirkeci 2011 *Cultures of Migration: The Global nature of contemporary mobility.* Austin: The university of Texas press

EAC Secretariat 2014 *East African community facts and figures-2014* Arusha, Tanzania: EAC Secretariat, EAC Headquarters,

Gammeltoft-Hansen, T. & N.N. Sorensen(eds.) 2013 *The Migration industry and the commercialization of international migration.* London; Routledge

Hong Kong Tourism Board 2008 *Visitor Arrival Statistics Dec. 2007*

―――― 2014 *A Statistical review of Hong Kong tourism 2013* Hong Kong Tourism Board

IOM(International organization for Migration) 2013 *World migration report 2013*. Geneva; International organization for migration

Kivisto, P. & T. Faist 2010 Beyond a border: The Cases and consequences of contemporary immigration. Los Angeles: Pine Forge Press

栗田和明編 2016a 『流動する移民社会―環太平洋地域を巡る人びと―』昭和堂

栗田和明 2016b 「東南アジアにおけるアフリカ系移住者」海域プロジェクト統括チーム（編）『21世紀海域学の創成：研究報告書３』立教大学アジア地域研究所

―――― 2015 『タンザニアを知るための60章 第二版』明石書店

ーーーー 2011 『アジアで出会ったアフリカ人――タンザニア交易人の移動とコミュニティ――』昭和堂

Kurita, K. 2005 Connections between the Nyakyusa and the Nkonde from the viewpoint of dance and trade: With Video data of dances. Tokyo: Centre for Human Migration and Acculturation Studies, Rikkyo University.

National Bureau of Statistics 2013 *Statistical Abstract 2012* National Bureau of Statistics, Ministry of Finance, Tanzania.

National bureau of statistics of China 2014 *China statistical year book 2014*『中国統計年鑑 2014』 China statistics press 中国統計出版社

ニューワース，R. 2013 『「見えない」巨大経済圏』 伊藤真（訳） 東洋経済新報社

丹羽 孝仁 他 2014 「タイ、バンコクにおける日本人居住者の特徴」『日本地理学会発表要旨集』日本地理学会
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajg/2014s/0/2014s_100040/_article/-char/ja/
最終閲覧日 2015年9月26日

OECD(Organization for economic cooperation and development) 2005 *Migration, remittances, and development.* Paris; OECD Publications.

The Tanzania tourism sector survey 2015 *The 2013 international visitors' exit survey report* Ministry of national resources and tourism

――WEB上の情報――

anpopo http://anpopo.com/index.php/action-viewnews-itemidid-9864 2008年閲覧

法務省統計局 http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001137580
2015年9月23日閲覧

法務省 出入（帰）国 http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_nyukan.html
2015年9月23日 閲覧

外務省領事局政策課 2012 『海外在留邦人数調査統計 平成24年速報版』
http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/12/pdfs/WebBrowse.pdf
最終閲覧日 2015年9月26日